衣食住生活
研究・活動レポート
第 7 号
目　　次

「活動報告」

—衣生活部門—

1．生活科学研究会活動
　　～ tomoni つながる和綿プロジェクト ～　への参加 …… 3
　　さぎ草祭　展示発表 …… 5
　　機織り体験　ワークショップ …… 8
　　講演会「染織と歩んだ30年 ― 美濃友禅の誕生 ―」 …… 10
2．「ECO＋ものづくりプロジェクト」の活動報告 …… 13
3．第9回　伝統文化裁縫コンテスト …… 15
4．第11回　岐阜マザーズコレクションコンテスト参加 …… 16
5．第31回　ア・ミューズ岐阜　ファッションショー参加 …… 18
6．本荘「雨乞い踊り」踊り子衣装製作について …… 21

—食生活部門—

7．「EAT＆スマイルプロジェクト#岐女大」活動報告
　　― 健康・医療分野、子ども・食育分野、食クリエイト分野 ― …… 27
8．第14回　高校生朝ごはんコンテスト …… 31
9．オープンキャンパスにおける小麦・卵・乳を含まない弁当の提供 …… 33

—住生活部門—

10. 各務原市空き家リノベーション事業2021 …… 37
11. 山県市佐賀空き家リノベーションプロジェクト2021 …… 39
12. 実習棟リノベーション工事2021 …… 44
13. 第13回わたしの住まいのリフォーム・デザイン案コンテスト2021 …… 46

衣　生　活
研　究　部　門

〔活動報告〕

生活科学研究会活動

～ tomoni つながる和綿プロジェクト ～　への参加 …… 3
宮本　教雄

さぎ草祭　展示発表 …… 5
宮本　教雄

機織り体験　ワークショップ …… 8
宮本　教雄

講演会 「染織と歩んだ30年 ― 美濃友禅の誕生 ―」 ……10
宮本　教雄

「ECO＋ものづくりプロジェクト」の活動報告 ……13
齋藤　益美

第9回　伝統文化裁縫コンテスト ……15
藤木　節子・三輪　聖子
齋藤　益美・長浜　小春
児玉　愛子

第11回　岐阜マザーズコレクションコンテスト参加 ……16
藤木　節子

第31回　ア・ミューズ岐阜　ファッションショー参加 ……18
藤木　節子

本荘「雨乞い踊り」踊り子衣装製作について ……21
長浜　小春・児玉　愛子
藤木　節子

生活科学研究会活動

～ tomoni つながる和綿プロジェクト ～ への参加

宮本 教雄

◆目的

「tomoni つながる和綿プロジェクト」とは、「日本の風土と日本人の肌に一番なじむ繊維である和綿を育て、糸にし、布にしていく過程の中で、アート、デザイン、ビジネス、福祉、農業の分野をつなぎ、新たな出会いと仕事が生まれる場づくりを目指しているプロジェクト」である。岐阜県ではぎふ清流プラザの公益財団法人岐阜県教育文化財団に事務局を置き、6 年前からこのプロジェクトを推進している。2022 年 1 月には「第 7 回 tomoni つながる和綿プロジェクト展 ～未来への GIFT、for a sustainable future ～」を開催して、和綿から製作した様々な繊維製品を紹介するとともに、無農薬有機栽培の基準に沿った和綿栽培農家や和綿栽培グループを募集していた。

一方、かつては日常生活圏内にあった、綿花畑や養蚕用桑畑は、今ではほとんど目にすることはできなくなった。学生達は着用している衣服のほとんどが綿製品なのに、本物の綿植物や綿花を見たことがないという。米綿の実物の綿花を見せて、種子毛の中の種子に触れさせた時には、目を丸くして驚いていた。生産現場を見たことがないと、綿繊維と綿糸と綿布が繋がらないのかも知れない。

そこで、生活科学研究会では、コロナ禍で従来の対外的活動がほとんど中止になったこともあり、令和 3 年度も和綿の無農薬有機栽培を行うことにした。種子はプロジェクトの事務局にいただいた。実際の綿植物の生育、きれいな本来の綿花、育った綿花の開裂を目にすることで、植物繊維の知識を深めるとともに、収穫した綿花をプロジェクトに寄付し、社会貢献の一端を担うことにした。

◆活動方法

前年度に続いて、倉庫にあった大型プランターを 6 個借り、6 号館北側の温室で栽培を開始した。4 月 27 日プロジェクトが規定する栽培基準にしたがい、指定の有機培養土を入れ、種子蒔きをした。前年度から継続して研究会役員になっている学生もいて、興味を持って作業をこなすことができた。

5 月上旬に研究会の役員会を開き、今年度の活動計画としてプロジェクトへの参加を審議した。そして 5 月 13 日に開催した総会で、今年度の活動にプロジェクトへの参加を提案して承認を得た。

6 月 8 日に間引きを行った。学生たちはプランター1 個に苗 3 本を残し、もったいない、可哀そうと言いながら、不要の双葉を引き抜いた。7 月 20 日に有機肥料の追肥、培養土の補充を行った。

8 月 6 日に最初の本来の綿花が開花した。クリーム色の花ビラの中央は紅色という、非常に特徴のある花である。花は次々に開花したが、この頃から学生達は夏休みに入り、後期開始までの盛夏時は交代での水やりが大変であった。8 月下旬頃はコットンボールが大きくふくらんだ。この時期は葉巻虫が付きやすいので、見つけた時には駆除を行った。9 月 13 日には植物の自立が不安定になったので、支柱立てを行うと同時に、枝が横に成長するよう摘芯をした。

9 月 28 日に最初のコットンボールが開裂して綿繊維が現れた。役員会委員たちは感激していた。

当初の計画通り11月まで収穫を延ばして、さぎ草祭にプランターごと展示し、研究会活動を紹介することにした。綿植物は順調に生長し、綿花は次々とコットンボールになり、いくつも開裂して綿繊維が露出した。

11月9日に開裂した綿花を収穫した。プランター栽培なので、露地栽培よりも量は少なかったが、きれいで柔らかい綿繊維が収穫できた。開裂しなかったコットンボールもあったが、好奇心旺盛な学生がナイフで切断してみると、中にはちゃんと綿繊維があった。

翌年2月10日、開会中のプロジェクト展に見学に行き説明を受けた。様々な活動を知るとともに、収穫した綿花を寄付した。

◆活動結果・考察

研究会役員の積極的活動によって、綿植物が種子から生育していく過程を詳細に観察することができた。これまで一度も見たことのない綿の開花、落花、コットンボールの生育と開裂を目の当たりにし、自然の営みに感激した学生が多くいた。自分達が着用している綿製品の基になる綿繊維が、長い生長期間を経て収穫されることを知り、衣服をこれまでよりも大事にしようと思ったはずである。

収穫した綿花はわずかではあったが、寄付することができ、和綿プロジェクト運動に貢献することができた。

綿花は紡績されて糸に、製織されて布になるが、その紡績工程や製織工程も知る機会があればと思う。さらに絹や羊毛の天然動物繊維についても、興味を持ってほしいと願う。

和綿プロジェクト事務局へ和綿の寄付（令和4年2月10日）

生活科学研究会活動

～ tomoni つながる和綿プロジェクト ～　さぎ草祭　展示発表

宮本　教雄

◆目的

生活科学研究会では、秋に開催されるさぎ草祭において、その研究成果を中間発表として毎年展示を行ってきた。役員会で検討した結果、今年度も「tomoni つながる和綿プロジェクト」について、展示発表することにした。前年度のさぎ草祭において、このプロジェクトの展示発表を準備したが、発表前々日に急遽中止が決まり、飾りつけを終えたばかりの展示品を撤去した苦い思い出がある。

普段見ることのできない綿植物を、プランターごと展示して来場者に見てもらい、綿製品になるまでを紹介することで、生活科学研究会の活動を知ってもらいたいと考えた。また、説明を行う研究会の役員や会員たちに、繊維に関する専門的知識が増えることも期待した。

◆活動方法

来場者のほとんどは実物の綿繊維を見たことはないであろうと考え、種播きからコットンボールの開裂までを詳細に撮りためた写真を印刷し、その過程に沿ってパネルに貼って説明を加え、綿植物の生育状態が解るように工夫した。また、岐阜県教育文化財団のプロジェクト推進事務局から、和綿プロジェクトを解説したパネルやパンフレット、コットンボールの綺麗なドライフラワーも借りることができた。さらに、綿花から綿種子を手作業で簡単に取り出すことのできる、綿繰り器も借りることができた。

tomoni つながる和綿プロジェクトの紹介

展示会場の壁際には写真パネルを並べ、中央にはコットンボールが実っている綿植物をプランターごと配置し、その手前に綿繰り器を置いて、来場者に綿繰り器の操作が体験できるよう工夫した。

研究会役員たちは、来場者の目を引くことができるようにさまざまな飾りつけにも工夫した。

綿植物のプランターごとの展示

展示完了　手前は綿繰り器

また、展示の準備段階において一部の役員から、来場者にアンケートをとって感想を聞いてみたいという意見が出た。そこで、答えやすい質問項目を 6 問考え、最後に自由記述欄を設けたアンケート用紙を準備した。当日は答えてもらうように積極的に働きかけることにした。

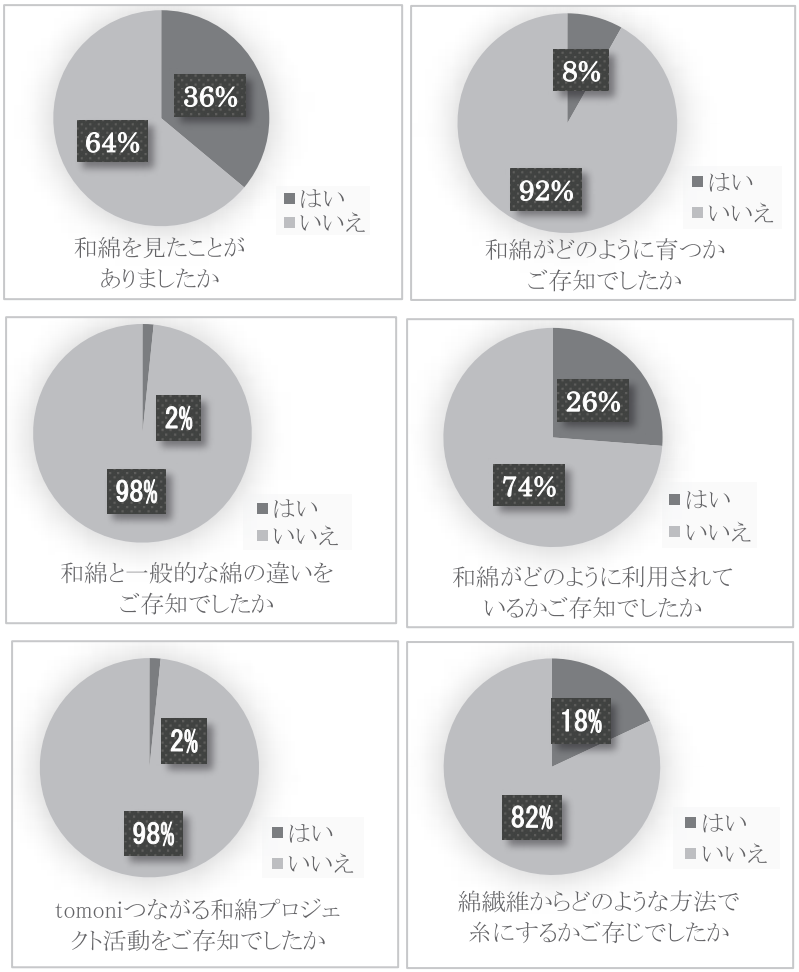
さぎ草祭当日は思いのほか来場者が多く、各時間帯に 2 名の説明要員では不足する時間帯があった。やはり、綿植物を初めて見た人は全体の 3 分の 2 ほどにも達し、工夫して展示した甲斐があった。アンケートには 61 名の人が気軽に答えてくださった。

◆活動結果・考察

綿植物の実物展示は、来場者に強い印象を与えたようである。小学生連れの若いご家族では、開裂したコットンボールに触りながら、柔らかいとかフワフワしているとか、感激されていた。中年世代の人は、生育過程の写真と実物を見比べながら、知識としてはわかっていても実物を見ると理解が深まる様子であった。また、熟年世代では、昔近所で栽培されていたのを見たことがあるけどこんな風だったねと、懐かしの会話が聞こえてきた。

右は 61 名のアンケート回答の集計結果である。

「はい」が一番多かったのは、和綿を見たことがある、の設問であったが、それでも約 3 分の 1 でしかなく、綿繊維から糸にする紡績を知る人は 20%にも達していなかった。繊維から糸に紡いで、それを織物にすることが、日常生活から忘れ去られているという感じがした。中には、綿が植物だと知らなかったという人や、考えたこともなかったという人もいて、少々驚きであった。



展示に関する来場者アンケートの集計結果

アンケートの自由記述欄には、次のような書き込みがあった。

・興味がもてた
・学生の頑張りが伝わった
・綿がもふもふしていた
・説明が分かりやすかった
・育つところが見られてよかった
・4 月になったら種を植える
・研究、取り組みが良かった
・和綿の作り方が勉強になった
・綿が植物だと知らなかった
・オクラと間違えそう、似ている
・一から育てて種と分けてみたい
・初めて見た、楽しかった
・身近に感じた
・育ち方がよく分かった
・実物展示が良かった
・初めて触った
・ピンクになることを知らなかった
・綿花から糸に紡ぐまでやってみたい
・和綿は優しい、白いもの。花は白だけ？
・色々知ることができて面白かった
・オクラの花みたい、綺麗、知らなかった
・実際に触ることができてよかった
・工程と比べて、服や製品は安い
・なかなかできない体験ができてよかった
・花を見てみたい
・種を初めて見た
・たのしかった
・考えたこともなかった
・どのように利用するか、収穫の仕方が知ることができてよかった、もっと知りたい
・米綿と和綿のさわり心地の違いが分かってよかった
・和綿が育つところを見たことがなかったためびっくりした
・模様があるものは和綿だけということを初めて知った
・ここに来ないとわからない知識だったので良かった

いずれも興味深く見学していただけた様子が伝わってくる自由記述であった。

小学生連れの数組の父親からは、家で栽培したいので綿繰り器で分離した種子を分けてほしいとの依頼があった。綿繰り実演用に準備した綿花は数年前の米綿であったので、保存してある和綿の種子を 10 粒ほどと、育て方のパンフレットを分けて差し上げた。お子さんの夏休みの自由研究にする様子であったので、開花は夏休み中に間に合うかも知れないが、コットンボールが開裂して綿花となるのは 9 月に入ってからになると思いますと話すと、少々残念なご様子であった。

自由記述欄に、綿の生育過程や糸、織布の工程に比べて、服や製品は安いとあったように、綿製品になるまでには膨大な時間と手間がかかっている。SDGs の観点からも、栽培、収穫された原綿が紡績、製織、製編、染色、仕上げ加工の工程を経た後、裁断、縫製されて流通、販売、消費にいたることを考え、さらに、使用後の被服の抱える大量廃棄処理問題まで考慮して、繊維製品を大事に使ってほしいと考える。

和綿プロジェクト展示会場

生活科学研究会活動

機織り体験　ワークショップ　　さぎ草祭　おひさまマーケット

宮本　教雄

◆目的

例年盛大に実施されるさぎ草祭を、コロナ禍の中で安全に実施するにあたり、さぎ草祭実行委員会では感染対策をどうするか度重なる検討を行い、人との距離が十分保てる屋外での企画を練った。その結果、例年は来場者駐車場にする西側広場に多くのテントを設置し、おひさまマーケットと名付けて、さまざまなワークショップを展開することになった。その企画部の部長が生活科学専攻の 3 年生で、1 年生の教養演習におけるデザイン織を体験していたことから、生活科学研究会に対して、ミニチュア織機での機織り体験ワークショップをしてほしいと依頼があった。

生活科学研究会では和綿栽培の実物展示をすることもあって、スタッフが不足気味であったが、研究会役員以外に応援を求める方向で検討した結果、研究会会長も副会長も企画部に協力しようということになった。生活科学専攻では研究会の発表以外に、Eco＋ものづくりプロジェクトの展示発表や、同じおひさまマーケットで製作小物の即売会もあるので、在学生のほとんどが何らかの形でさぎ草祭企画にかかわることになった。

ワークショップを引き受けたものの、一般来場者にミニチュア織機のデザイン織体験が、どれだけ興味を持ってもらえるか非常に不安であった。というのも、色柄を想定して、経糸や緯糸の糸決めから始まって、経糸張りや緯糸通しの作業をコツコツと行い、コースターくらいの大きさの織物を完成するまでには、手先の器用な人でも 1 時間半はかかる。ワークショップ担当の学生には、受付前に約 2 時間かかることを伝えたうえで、納得してもらって体験してもらうように伝えておいた。

◆活動方法

さぎ草祭当日は幸い 2 日とも秋晴れの晴天に恵まれた。機織り体験担当者は、事前にミニチュア織機数台に目立たない色の経糸を張っておいた。特にデザインにこだわらない人のために、早く織り終えるようにするためである。私も含めて担当者は、機織り体験はとても時間がかかるので、そう多くの体験希望者はいないだろうと思っていた。

ところが、おひさまマーケット開催時間の午前 11 時には、新 4 号館の北側道路に長い列ができていて、入場を待つ人が密状態になっていた。

そのような状態でも、展示即売会に人は流れるだろうと思っていた。しばらく経つと、機織り体験スタッフからメールが入り、体験希望者が多いので研究室に残っている織機を全部出します、とのことであった。和綿展示

機織り体験受付

会場にも多くの来場者がいたが、そこは担当者に任せてマーケットに応援に行くと、スタッフが大忙しで対応していた。時には隣の Eco＋ものづくりプロジェクトのスタッフが応援してくれていた。

体験希望者の多くは経糸も緯糸も自分好みの色を選び、柄を織り出して自分好みのものを製作したいという興味津々の人が多くいて、初めの予想とは大きくはずれてとても驚いた。特に小学生のお子さん連れのお母さんや、かつて少し手織り経験のあるシニア世代の女性が多く、スタッフの学生とにこやかに会話しながら手を動かしていた。ミニチュア織機の取り扱い説明書は準備したものの、製作段階ごとの説明は口頭の方が早いので、テーブルごとに進行状況を把握して説明しに回った。

◆活動結果・考察

一番印象に残っている参加者は、小学校低学年の手先の大変器用な女の子で、お母さんの横で懸命に緯糸を入れていた。織物の柄が少しずつできてきた時、お母さんに向かって、今度のクリスマスプレゼントにはこの織り機がほしいとねだっていた。そこで、メモ用紙に購入方法とおおよその価格をメモして、目配せをしながらそっとお母さんに渡すと、お母さんは、じゃあサンタクロースさんに頼んでみようねと笑いながら答えていた。とても微笑ましく、心が和んだ一幕であった。

また、名古屋のアパレル関連会社に勤務しているという若い女性 2 人連れは、日頃布を扱っているだけあってデザインにこだわり、布目の揃ったとてもきれいな織物を作成していた。

織機全てが使用中の場合はお断りせざるを得ず、また、2 日目は午後 3 時までという時間の関係で、2 時頃来られた来場者にもお断りをせざるを得ず、残念な思いであった。2 日とも盛況であった背景には、メイン会場における食品模擬店の提供数が来場者数に比べて少なく、チケットを持った人がおひさま会場に多く流れたことが考えられる。最終的に機織り体験数は 51 組にもなった。

機織り体験の様子と作品

生活科学研究会活動

講演会 「染織と歩んだ 30 年　－美濃友禅の誕生－」

染織作家　河村　尚江　さん

宮本　教雄

◆目的

生活科学研究会では毎年講演会を開いており、生活科学分野に関する知識や技能を深めるため、主に岐阜県で活躍されている専門家に来ていただき、有益な講演をしていただいてきた。時には、教職に就きたい学生のために、本学の卒業生で実務経験豊富な現役の先生に来ていただいて話をしていただいた。令和 2 年度も、卒業生の方々に来ていただいて、学生時代のお話を聴く企画を立てて依頼も済ませたが、コロナ感染症拡大の影響で、県をまたぐ移動自粛のため延期になった。

役員会でどのような講演内容が生活科学専攻の学生に有益かを話し合った時、専門分野に関係の深い“衣服”の分野で、岐阜県で活躍している女性の専門家を探してみることにした。

◆活動方法

役員会でいろいろ検討中、令和 3 年 6 月発行の情報誌「Genki！ぎふ」11 号に、“美濃友禅”というブランドを立ち上げた河村尚江さんという染織作家が紹介されていたことを思い出した。中日新聞の岐阜地方版にも“今、岐阜市で最も輝いている女性”の一人として紹介されていた。そこで、本学に来ていただいて講演をしていただけるかどうかお伺いすることにした。

令和 3 年 10 月 19 日、岐阜市内の河村尚江デザイン事務所に、講演を受けていただけるかどうか打診をメールで行った。すぐに返信をいただき、学生のためになるならとご快諾をいただいた。その後、メールでやりとりを続け、講演日は河村さんの県博物館での展覧会が終了した 10 日後の、12 月 15 日に決定した。時間は学生全員が揃うことを考慮し、必修科目の Eco＋ものづくりプロジェクトの 1 コマをいただくことになった。講演会場は、7 号館 1 階の 07101 大講義室とした。

講演の 1 週間前、河村さんからのお申し出もあって、会場教室の下見と音響設備やパワーポイント操作の確認を行った。河村さんからは、講演依頼のきっかけとなった、情報誌「Genki！ぎふ」11 号を学生の数いただけることになった。

◆活動結果・考察

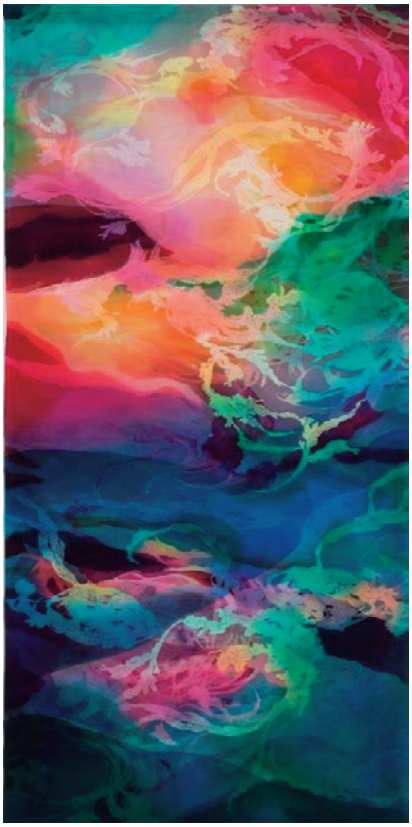
ご講演はご自身が作成されたパワーポイントに沿って、①染織作家になった動機と魅力　②略歴　③美濃友禅の活動内容　④友禅技法の紹介（一般的な友禅と美濃友禅）　⑤美濃友禅の大きな 3 つの転機　⑥美濃友禅の目指すところ　⑦30 年の振り返りとこれからという順でお話しされた。

日本国内における作品展でのご活躍を始め、ドイツ、アメリカ、フランスでのご活躍の紹介があり、作品の一部はこの近くでは、岐阜市役所議場前ロビー、岐阜商工信用組合本店ロビー、JRゲートタワーホテルロビーを飾っているということであった。また、東京オリンピックにちなみ、参加約 200 国をモチーフに着物を製作するプロジェクトに参加され、コソボ共和国を担当された話をされた。このコソボ共和国にちなんだ着物を制作された場合を例に出して、着物のデザインから完成までの友禅染工程を順に追った製作説明があった。

友禅染は京友禅を始め、加賀友禅や名古屋友禅があるので、一般的な友禅染の工程の説明の後、ご自身の美濃友禅の染色制作工程の詳細な説明があった。型紙彫りから、紗貼り、1 回目彩色、型置き、糸目糊、2 回目彩色、蒸し、糊落とし水洗い、乾燥と、気の遠くなるような細かな工程であった。作品によっては、この工程を数回繰り返すというから驚きである。

美濃友禅の特徴は、①伝統工芸の枠を超え分業職人に頼らない染色の新しい取り組み、②癒しをテーマに自然界や宇宙植物からインスピレーションを受けて創作、③タペストリーなどの染めた布による空間演出を展開、④色彩の持つ力を追求し色彩による心安らぐ世界を提供する、の 4 点である。

また、美濃友禅が目指すものは、これまでの日常が非日常にとなった今の灰色の世界には、乗り越える力となる色を入れることが大切で、そこに美術の価値を見出せると考え、困難な時代に鮮やかな色を届けるために様々な布を染め上げ、色彩による心安らぐ新しい世界の創出を目指している、とのことであった。



ご自分の創作活動を振り返り、今後も人の「えん(縁)」や、つながりの「えん(円)」を大事にするとともに、作品を通じて色により人々に笑顔や癒しを届けたいと、今後の抱負で講演を結ばれた。

講演の途中にとても素晴らしい作品の実物を見せていただいた。大きく広げたときは、学生の中から感嘆の息遣いが聞こえた。それくらい素晴らしい作品であった。一般に美的作品制作に携わって、芸術家の域に達している人は、感受性豊かに感じていることを言葉に表すことが苦手な人がいるが、河村さんの場合はとても分かりやすく、順序立てて詳しくお話をいただくことができた。

講演後の学生の質疑応答では、1 作品にかける時間の質問があった。普通の作品で 2 年、場合によっては 9 年という答えに、大変驚くとともに、作品の繊細さや見事なグラデーションを実際に見ているので、全員納得の様子であった。講演後に提出された学生達の感想レポートは、感激した記述がほとんどで、モノづくりの大変さや不断の努力の大切さが十分伝わったようであった。

本専攻カリキュラムでは、「衣」に関する科目を比較的多く配置して、衣料管理士を養成している。繊維学、材料学実験や染色加工学実験で理化学的体験をし、平面構成や立体構成の実習科目で被服構成の経験は積めるが、いろいろな染色技法を体験することまではできていない。

生活科学研究会での定例講演会として、染織デザイナー、クリエーターとして工芸の域にある河村尚江さんの講演は、学生達にとってとても良い経験と刺激になったと確信している。お忙しい中講演を快諾していただき、資料までいただいた河村さんには、心から感謝申しあげたい。

「ECO＋ものづくりプロジェクト」の活動報告

齋藤　益美

◆活動の目的

生活科学専攻の全学生を構成員として「ECO＋ものづくりプロジェクト」の活動を行っている。環境に配慮したものづくりをコンセプトにグループ活動、地域の方々と接するイベント参加やワークショップの企画・運営を行っている。幅広い年齢層の人々や地域社会と関わる機会を増やしコミュニケーション力を高めるだけでなく、グループでの商品企画・製作、イベントの企画・運営を通して仲間と協力し成し遂げる経験ができる機会となっている。学生一人ひとりが生活者として、また社会人としての資質の向上を目的として活動している。また、本専攻は中学校・高等学校の家庭科教員を目指す学生が多く、これらの実践的な活動は、被服製作の技能の習得だけでなく、教育力の向上につながると考えられる。

◆活動方法

運営委員が年間の目標・計画をたて、それに基づき1～4年生の縦割りで構成されたグループがリーダーを中心に活動している。運営委員会、リーダー会を開催し、活動の計画と周知、グループ作品の開発・検討、グループの問題点、イベント開催等の話し合いを行い、各グループがそれぞれのテーマと目標を持って活動できることをめざしている。 今年度はひとりひとりが役割りを認識し活躍できるように、3グループから4グループに分け、グループの人数を減らして活動している。リーダーもメンバーの特性を理解しやすく、アドバイスも適確にできている。

毎年行っている商品販売、ものづくり体験のワークショップ、親子のものづくり体験などのイベントがコロナ感染拡大により縮小され、限られた中での活動となっているが、機会をみつけ地域の方々と関わり、環境に配慮した生活とものづくりの楽しさを伝えている。

写真１寺mamaマーケット出店の様子

◆活動報告・考察

今年度は3月から運営委員会・リーダー会を行い、活動目標や計画を検討した。4月には新入生歓迎会でグループ活動をスタートさせた。コロナ禍で中止になっていたイベントも徐々に再開されており、ワークショップや展示、クラフト展や手づくり市への出店の機会も増えた。6月にはしのうえ市（岐阜護国神社）、10月栗祭り（山県市）、さぎ草祭（岐阜女子大学）、寺 mama マーケット（妙照寺）、乳弁天手作り市（吉祥寺）に出店することができ、グループの商品の販売状況や、購入者からの多くの意見を聞き、グループの活動と商品企画の見直しにつなげることができている。ワークショップでは幅広い年齢層の人に手作りの楽しさを伝え、環境に配慮した身近なアイデアを伝えられるように内容を毎回検討している。それらの情報は SNS やブログを利用し毎

週の活動とともに発信している。

10月には岐阜市立図書館分館にて『着用されなくなった“きもの”のアップサイクルにチャレンジ！～着る機会がなくなった大切な思い出の“きもの”をもう一度着てみたいと思いませんか～』のテーマで展示を行った。身近な問題に目を向け、調査・研究と作品製作に取り組んだ。裂き織りと被服や小物の製作は大変な作業であったが、運営委員が夏季休暇を利用して行った。

写真２　展示「着用されなくなった“きもの”のアップサイクルにチャレンジ」

学生が大学の授業だけでは得られない時間を楽しみ、自分の作ったものを買ってもらえるうれしさや責任を感じ、ものの価値について考えることができる活動にしたい。ワークショップでは自分のできることを人に伝えることの難しさと楽しさを知り、技能の習得とコミュニケーション力の向上につながることを期待している。

2・3月には3年生企画のワークショップ「親子の手づくり企画」を計画している。今年度もお母さん、お父さん、子どもたちと一緒にものづくりを通して楽しい時間を過ごしたい。

ECO＋ものづくりプロジェクトを通して、1年生は早い段階から先輩たちと関わりを持ち、学生生活にスムーズに馴染んでいく様子がうかがえる。同学年でなじめない学生も上級生がうまく関わり、徐々にその学生の良さを引き出してくれることも多く、孤立や退学の減少につながっている。

令和４年度活動状況および予定

月	活動状況	運営・リーダー会
3・4	運営委員・リーダー・グループ決定	運営委員会・リーダー会
4・5	1年生歓迎会　１年生技術指導（ECOフラワー・裏付きトートバッグ）	材料準備
	グループ製作商品の検討会	リーダー会・運営委員会
5～7	グループ活動（商品企画・製作）	
6	**はしのうえはみだし市(販売・ワークショップ)**	運営委員会
7	**まちなかスクエアーガーデン（雨天のため出店中止）**	
8	懇親会（カレーパーティー）	運営委員会・リーダー会
8・9	市立図書館展示のための調査・製作・準備（運営）	運営委員会
9～11	グループ活動	
10	**岐阜市立図書館分館展示（着用されなくなった“きもの”のアップサイクルにチャレンジ！）**	展示・撤去作業(運営)
10	**山県市栗祭り（販売・ワークショップ）**	
10	**さぎ草祭模擬店出店（ワークショップ）**	
10	**寺mamaマーケット出店（販売・ワークショップ）**	
11	**乳弁天手作り市（販売・子ども遊びスペース）**	
12・1	出店予定	運営委員会
2・3	親子の手づくり企画（3年生担当・2回開催予定）	運営委員会

第 9 回　伝統文化裁縫コンテスト

藤木節子、三輪聖子、齋藤益美、長浜小春、児玉愛子

◆目的

平成 25 年度より中学・高校生を対象に、伝統文化裁縫コンテストを実施している。今回で9回目を迎えることになる。中学・高校生が日本の伝統文化に触れ、布を用いて作品を製作することを通して、製作に関する基礎的・基本的な知識および技能を身に付けるとともに、物作りの楽しさを実感し、生活を豊かにするために活用する能力と創造力を育てることをねらいとしてコンテストを実施する。

◆活動方法

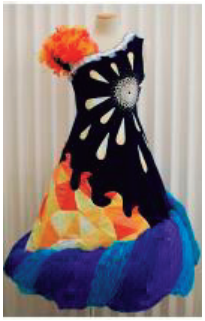
テーマを「日本の四季と伝統行事」とし、『変化した日常にあっても季節は移ろい、生きものは息づき、草花が咲き続けています。二十四節気と季節の移ろいも変わらず豊穣や家族の健康を祈る年中行事が行われます。失うものもあれば育み続けられるものもあります。今の日本の四季と伝統行事に目を向けてみましょう。』と呼びかけた。衣装を製作する衣服作品部門と、トートバッグのアイデア作品部門とに分かれており、中高校生が興味を持ち応募することを期待している。

◆活動結果・考察

衣服作品部門の 1 次審査応募作品数は 44 点、アイデア作品部門は 36 点であった。

○衣服作品部門の優秀作品

最優秀賞



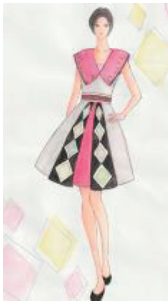
岸　茉央

岐阜県立岐阜城北高等学校

優　秀　賞

渡邉　怜奈

多治見西高等学校



梅下　詩央里

岐阜県立東濃実業高等学校

○アイデア作品部門の優秀作品（優秀賞）

郷原未来　（岐阜城北高等学校）

鰐部七海（岐阜清流中学校）

岩井陽芽（東濃実業高等学校）

第11回　岐阜マザーズコレクション・コンテスト参加

藤木節子

◆目的

一般社団法人岐阜ファッション産業連合会が主催する第十一回岐阜マザーズコレクション・コンテストに三回目の挑戦をした。2 年「ファッションデザイン画実習」の成果発表のみならず、ファッション分野に興味・関心を持ち、デザインコンテストへの意欲ある学生を対象とした。

◆活動方法

産学コラボレーションプロジェクト（岐阜ファッション産業ブランド確立支援事業）の一つである岐阜マザーズコレクション・コンテストは、岐阜アパレルメーカーと未来のデザイナーを目指す学生とのコンテスト形式の企画である。『お母さんにきてもらいたい「素敵な服」をコンセプト』にお洒落で着易く斬新な未発表オリジナルデザインの公募コンテストである。

今回の募集テーマは「Vivid Mother's」（ビビッド マザーズ）～いつまでも憧れのママで～である。これは、新型コロナウイルスで沈むアパレル業界が元気づくよう、華やかな色彩を強調しているテーマである。生活科学専攻の 1 年 5 名、2 年 4 名、3 年 5 名の計14名がデザイン画を応募し、一次審査で 4 名のデザイン画が入選し、作品製作に挑んだ。全体では全国の大学、専門学校、高校から 79 点の応募があり、14 点が一次審査通過している。

◆活動結果・考察

デザイン画による一次審査応募作品の展示の様子、一次通過・製作した本学学生 4 名の作品は、以下の通りである。

写真1　一次審査・デザイン画展示

写真 2　一次審査通過 4 作品（左から
長谷川美佳さん、華井展子さん、伊藤結菜さん
橋爪愛未さん）

令和３年 12 月５日岐阜ファッション産業連合会事務所において二次審査が行われ、橋爪愛未さんの作品テーマ「大人の休日」が、ブロンズ賞の「岐阜ファッション産業連合会理事長賞」を受賞した。ゴールド、シルバーに続く三番目の好成績を修めることができた。

写真３　審査会場の展示

写真4　ブロンズ賞橋爪さんの作品

－考察－

当初は、ねんりんピック会場での公開審査・ショー開催予定であったが、コロナ禍による中止となり 12 月に非公開の審査会の運びとなった。本学では連続して受賞することが出来、デザイン画からどう作品に落とし込むか、素材の選択・どんな技法を取り入れるか等の創造性・技能が重要になることを、改めて把握することになった。

三回目の本コンテストへの挑戦により、学外における評価を得て、学生にとって自信となるとともに、具現化することの難しさの課題も残した。更に前向きな姿勢・やる気へと成長したと感ずる。

受賞後の橋爪さんの感想を記す。

『今までにデザイン画を応募したことはありませんでしたが、コーディネートを考えることや、人物画を描くのが趣味だったので今回のコンテストに挑戦しました。衣服の縫製は基礎的なことは授業で学習していましたが、正直なところ得意ではありませんでした。そのため、先生からの説明は理解するまで繰り返し聞いてメモを取り、縫った所を解いてまた縫い直したりと、デザイン画通りの綺麗なものに仕上がるように頑張りました。このコンテストを通して、授業だけでは学ぶことのできなかった知識・技能を得ることができ、貴重な経験ができたことを嬉しく感じています。

一歩踏み出し新たに挑戦すること、目標に向けてコツコツ努力することの大切さを改めて実感しました。今後もこのような機会があれば積極的に参加していきたいです。』

今後更に学生が一人でも多く、諦めずに可能性への挑戦をして欲しい。そして卒業後は家庭科教員として務め、後継者育成の一躍を担うことを期待する。

第31回　ア・ミューズ岐阜　ファッションショー参加

藤木節子

◆目的

未来のデザイナー・学生応援プロジェクトとして、ア・ミューズ岐阜では、新たな産学プロジェクト＝「岐阜アパレルとファッション専科のある学校とのファッション連携」としてのショーの企画が実施されている。それは、ファッションショーのステージを発表の「舞台」として使用し、作品発表を通して新たなステップアップを目的としている。

本専攻・ファッションデザイン部ではデザイン・被服製作分野に強い学生を養成することを目指しており、学修成果を表現できる絶好の機会として「第31回ア・ミューズ岐阜」（一般社団法人　岐阜ファッション産業連合会主催　岐阜県、岐阜市後援）「スチューデント・プレヴューショー」に平成 31 年度、令和 2 年度に引き続き三回目の参加をすることとした。

◆活動方法

コロナ禍で新たな生活スタイル＝ソーシャルディスタンス」があたりまえの社会、時代、日本を元気にするようなイベント企画として「第31回ア・ミューズ岐阜」は、当初令和年4年 3 月1日～2 日の 2 日間じゅうろくプラザにて開催予定でオープニングセレモニーは中止、展示はオンライン展示として、3 DVRインターネット上で発信、ファッションショーのみ無観客で開催し、オンラインでの配信と計画されていた。しかし、新型コロナウイルス感染症第六派が拡大している中、一部変更され 3 月 2 日一日のみの開催となった。

本学ではテーマ『彩り』として、日常と共にある「洋服で何気ない日々をパッと彩ることが出来て心が晴れるような、作品作りを行うことにした。1 年から 3 年の 12 名が参加し、一人ひとりの個性が詰まった「彩り」の作品を紹介することとした。

写真1　じゅうろくプラザ　ア・ミューズ岐阜　スチューデントプレヴューのステージスクリーン

◆活動結果・考察

1．　令和 4 年 3 月 2 日（水）会場は、じゅうろくプラザ2F　特設ステージ（岐阜市文化産業交流センター　岐阜市橋本町1－10－11）9 時に会場入り、リハーサル後ランスルー（通しリハ）14 時半、ショー本番は 17 時スタート、　オープニング（柴橋岐阜市長等出演）・ア・ミューズファッショ

ンショー、マザーズコレクション作品紹介・スチューデントプレビューショー：岐阜市立岐阜女子短期大学・コロンビアファッションカレッジ・飯原服飾専門学校・岐阜女子大学、最後は 4 校合同フィナーレの流れで行われた。ファッションショーは無観客で開催し、YouTube チャンネル「ギフまるけ」で 3 月中映像配信された。

2．今回のテーマ「彩り」では三部構成として、タイトルをそれぞれに決めて変化のあるショーの構成とした。

パート1は、カジュアルなスタイルの中に、それぞれの「私らしさ」を表現した。パート 2 のクロウズは、英語でカラスを表していて、黒を基調としてクールな女性をイメージした。パート 3 は、花のようにそれぞれの色や形があり、個性を大切に、一人ひとりが花開く様子をタイトルに込めた。フェミニン・エレガント系のドレスでまとめた。

写真 2　パート1 「me.」（ミー）

写真 3　パート 2 「Crows」（クロウズ）

写真4　パート 3 「Fleur」（フルール）

－考察－

意欲の高い学生が集まり、大学内では経験できない貴重な充実した時間を経験することができた。学年末考査終了後からが正念場で、短期集中での衣装製作、音決め、モデリング・ポージングとそれぞれに考え、練習しランウエイを歩いた 12 名。4 校のトリとしてショーを無事飾ることが出来た。不安や緊張の表情も見られたが、何よりもファッションが好きというメンバーの思いが伝わってきて、上級生下級生が一緒になってよりよいステージ構成を考える姿は頼もしく感じた。

学生間の自主的な活動により、計画性や自己表現の難しさ、作品製作の達成感とステージ上の表現力と共に、何よりもチームワークを体感したと思われる。このことは、学生だからこそ経験できる宝だと感ずる。

今後も、大変だから無理と決めつけないで、ポジティブにチャレンジして自身の成長につきあっていって欲しいと考える。今回は、大学祭において初のファッションショーの機会を得て、再演は自信となり思い出深いものとなった。

写真5　フィナーレ後のステージの様子と、ショー参加の全員集合写真

写真 6　10 月 15 日さぎ草祭にて初めてのファッションショー

本荘「雨乞い踊り」踊り子衣装製作について

長浜小春、児玉愛子、藤木節子

◆目的

本荘地区の雨乞い踊りは 400 年以上前から行われ、100 年前に復活し、明治 28 年まで実施されてきた。戦争により中断され今日に至っていたが、7 年前に「本荘の歴史を語る会」により着手し、現在 6 年目である。

これら歴史を紐解く際に本学の丸山幸太郎先生が携わられたこともあり、被服を学ぶ生活科学専攻に、令和 2 年 11 月に「本荘の歴史を語る会」浅野晃一郎会長と和田浅治氏の 2 名が来校され、令和 4 年度ジュニア文化祭に着装したいと、踊り子の衣装製作の依頼があった。

◆活動方法

令和 2 年度後期に雨乞い踊りの資料・データを参考に、デザイン考案を 2 年「洋服造形実習Ⅳ」の授業内で取り組み、デザイン決定後、令和 3 年度後期に布地発注、製作を 3 年「和服造形実習Ⅳ」で行った。

サイズは L サイズ 4 枚、M サイズ 11 枚、S サイズ 8 枚の計 23 枚を製作した。

◆活動結果・考察

令和 2 年度後期の洋服造形実習Ⅳにおいて 2 年生に衣装デザインを冬休みの課題とし、着装画または衣装のみのハンガーイラストを描くこととした。

デザイン画を描く際の留意点として、踊り子が小学生 1～3 年生中心で 15～20 着を製作する予定で、機能的かつ長く着用できる衣装（洗濯できる）をデザインすることを挙げた。

デザイン画は 14 点集まり、学内で 7 点に絞った。これら7点を浅野氏、和田氏に提案したところ、本荘神社・まちづくり協議会のメンバーと相談の結果、長谷川美佳さんのデザインをベースに再度デザインに手を加えることとなった。

図 1 長谷川美佳さんデザイン

図 2 最終決定したデザイン

完成したデザイン画を基に、染色してもらうため、相撲旗で知名度の高い吉田旗店を訪れ使用布と色の打ち合わせを行った。

布は洗濯強度や扱いやすさを考慮し、やや厚めの木綿生地で、表に斜めに細かな凹凸があり、染色の発色がよく、独特の風合いのあるシャークスキンを使用することとなった。

当初、染色においては型染を行うよう検討していたが、コストの関係でプリント印刷に変更した。なお染める布によって色相、明度、彩度の変化があることを考慮していなかった為、使用布と近い布を実際に染色した見本布を見せていただき、配色変更を行った。

デザイン段階では浴衣地での製作を予定していたため、シャークスキンの厚手生地への変更は、ミシンで失敗すると穴が開くリスクがあること、衿付けのカーブ縫い等を考慮し一度デザインを法被のような形に変更し見本の製作を行った。変更後のデザインは袖付け寸法、袖口寸法をそろえ袖つくり、袖付けを簡略化、衿も裾までの直線とし、なるべくカーブを少なくした。

見本製作後、「本荘の歴史を語る会」和田浅治氏に小学生への試着をお願いし、着装時の写真と意見をいただいた。

要望としては法被型ではなく、衽の付いた浴衣や甚平の形にすること、後ろ身頃と、前身頃に 5 cm 程度の差をつけ脇スリットを長めにつけることがあげられ、要望を基に、寸法を下記のように定め、吉田旗店にプリントを依頼した。

表 1　出来上がり寸法表

	S	M	L
出来上がり寸法(cm)			
前幅	54	58	58
後ろ幅	54	58	58
前丈	70	75	80
後ろ丈	75	80	85
衿肩空き	6.5	6.5	6.5
衽下がり	20	20	20
袖丈	20	21	22
袖付け	40	42	44
袖口	50	52	54
衽つけ	50	55	60
衽幅	15	15	15
衿下	25	30	35
衿幅	5	5	5

写真1　吉田旗店との打ち合わせの様子

図 3　浴衣型デザインのプリント印刷

写真2　完成した衣装の前身頃

写真3　完成した衣装の後身頃

これまで生活科学専攻では、自分のサイズに合わせた自分の為の衣服作りを主として行ってきた。

今回は外部からの依頼を受け、着ていただく人を想い描き、喜んで着ていただける被服製作が求められたが、コロナウイルス感染症の影響や学生の授業とのバッティングもあり、依頼側とのイメージ共有の機会不足や、着てもらう小学生への寸法確認等ができなかった。その為、本来であればデザイン、型紙製作、仮縫製、試着、型紙変更、染色依頼の順で行うべき部分で、十分な情報が得られないままに進めることとなった。

今後、同様の依頼等機会があれば、相互のやりとりを充実させるとより効果的に取り組めるのではないかと考えられる。

依頼された 23 着は 12 月 14 日に製作が完了し、令和 3 月 19 日には体育館での本荘小学校成果発表会において衣装の贈呈式と同時に衣装を着装し雨乞い踊りが披露された。

令和 4 年 10 月 15 日に行われたさぎ草祭にも野外ステージにて踊りが披露された。

学生には完成の喜びだけでなく、伝統文化の継承の一役を担っている自覚を持たせたいと考える。

この機会を頂いたことに感謝するとともに、今後も地域と連携し、地域貢献のできる人材育成に取り組んでいきたい。

写真4　さぎ草祭での演舞の様子